375.9
M014
資料室

高等科國語 二

文部省

43086
教科書文庫
4
810
33-1944
2000.0
14548

高等科國語 二

文部省

資料室
375.9
M014

目録

一　富士の高嶺……四
二　單獨飛行……六
三　鎌を打つ……十六
四　田園の曲……二十三
五　級會で話したこと……二十八
六　姫路城……三十六
七　旅の思ひ出……四十三
八　輸送船……五十
九　ハワイ海戰……七十二
十　亡きあと……八十六
十一　春の水……八十八
十二　單語のいろ〳〵……九十
十三　雪の山……百五
十四　山ざくら花……百十六
十五　大君のへに……百十九

廣島大學圖書之印
廣島大學教 14548 圖書

一　富士の高嶺

山部赤人

天地のわかれし時ゆ　神さびて高く貴き　駿河なる
富士の高嶺を　天の原ふりさけ見れば　渡る日のか
げもかくろひ　照る月の光も見えず　白雲もいゆき
はゞかり　時じくぞ雪はふりける　語りつぎいひつ
ぎゆかむ　富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に
雪は降りける

柿本人麻呂

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つ
らしも

安倍仲麻呂

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月
かも

大伴家持

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山にこがね花咲
く

二　單獨飛行

一

拜啓、秋冷の候、父上様を始め、皆々様御壯健の由、何よりの御事と御喜び申し上げ候。　この頃は、取り入れに引き續き麥蒔きの季節にて、御多忙のほど察し奉り候。　何とぞ、おからだ御大切に願ひ上げ候。　さて、本日は、入隊以來念願致し候單獨飛行首尾よく許可せられ候につき、喜びのまゝ、御報告申し上げ候。　教官の懇切なる御指導はいふまでもなく、日頃父上母上始め、皆々様の溫かき御激勵の賜ものと、深く感謝仕り候。　右單獨飛行の模様を、別文の通り相認め候間、拙文にて恐れ入り候へども、御判讀御想像成し下され候はば、幸甚の至りに候。　先づは御報知申し上げたく、かくの如くに御座候。　拜具。

年　月　日　　耕一

父上様

二

朝露を含んだ練兵場に全練習生が集合して、嚴かな朝會をした——　澄みきつた朝の空を仰ぎながら。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

の御製を拜誦した時は、全身が清められる思ひがした。

身支度をして飛行場に行くと、既に練習機は、三十機きちんと勢揃ひをしてゐた。　これらはみんな、整備練習生が一心になつ

て、手入れをしてくれたものである。

飛行服に着かへ、整列をして分隊長の訓示を受けた。

「昨日までは、教員と同乘して操縱を學んで來た。今日は練習飛行の上、成績の良いものに單獨飛行を許可する。」

一日として忘れることのできなかつた單獨飛行が、いよ〳〵許されるのだ。うれしくてならない。分隊長から更に、

「一人になると、とかく固くなり過ぎて失敗しがちだから、落ち着いてやれ。」

と親切な注意があつた。

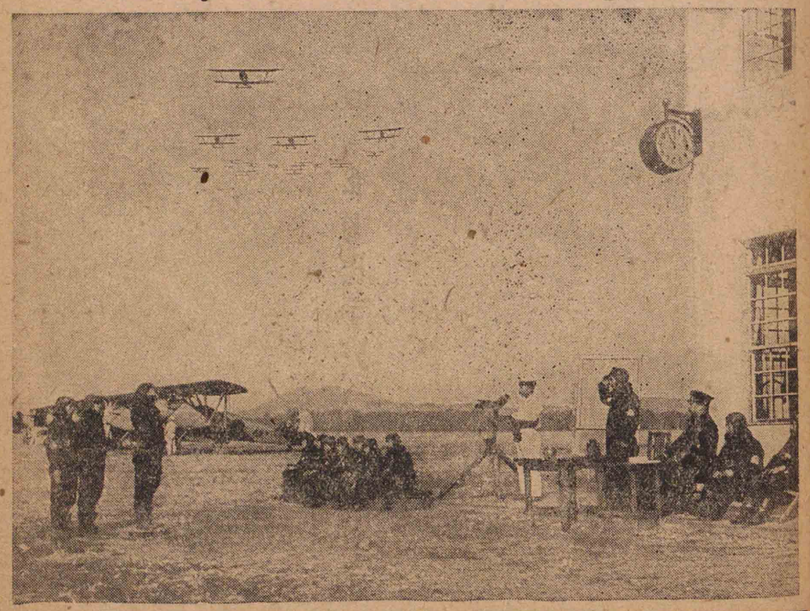
飛行練習が始り、仲間の者は、順々に教員と同乘して飛び立つて行く。今日は、みんな張りきつてゐる。自分の番が來たので、

駈足で上官の前に進む。さうして、

「岡田練習生、同乘出發します。」

と大きな聲で報告し、すぐ教員と練習機に同乘して、飛行練習に移つた。

先づ、誘導コースを一廻り飛んでから着陸し、再び上昇して同じコースを廻つて着陸する。更にもう一度くり返すのであるが、離陸よりも、飛行よりも、む



づかしいのは着陸の仕方である。したがつて、操縱の成績は、この着陸の具合によつてきまるといつてよい。

第一回の着陸は、機首をさげ過ぎたため、機體がはずんで、ジャンプしてしまつた。二回めには、ほどよい三點着陸ができた。三回めには、心にゆとりもできてゐたので、一層うまく行つたやうに思つた。しかし、同乘の教員は、良いとも惡いともいはない。やはり不合格かなと思ひながら、練習機からおりる。すると、教員は私を分隊長の前につれて行つて、

「岡田練習生の單獨飛行を許可します。」

と報告した。私は、夢ではないかと思つた。仲間の者も、「よかつたな。」「よかつたな。」といつて、心から喜んでくれた。

單獨飛行を許された者は、いかにもうれしさうな顏をして集つてゐる。やがて私の名が呼ばれた。私は分隊長の前に立つて、

「岡田練習生、離着陸、單獨出發します。」

と元氣一ぱいで報告をした。ついさつきまで、「同乘出發します。」といつた者が、今始めて「單獨出發します。」といふ。わづか「單獨」の一語ではあるが、その中には、限りない誇りと喜びがこもつてゐる。

出發のしるしに名札を裏返して、練習機へ駈足で行く。プロペラが氣持よく廻つてゐる。赤い單獨旗を愛機の柱にしつかりと結び附け、整備練習生に感謝しながら搭乘(たうじよう)した。落下傘を

身に着け、安全帶をしめる。　かうした細かなことにも、一人になると妙に氣が張る。

發動機は好調子だ。

「よしつ。」と合圖の手を擧げて、車輪止めをはづさせ、滑走して風に向かつて飛び立つた。　その瞬間、那須の餘一の姿が浮かんだ。さうして、自分が、ひようと放つた矢になつて、今大空を飛んで行くやうに感じた。　正面の筑波山が、「やあ、一人歩きができるやうになつたな。」と迎へてゐる。　右へ旋回すると、霞が浦が美しくたたよひ、遙か遠くには東京灣が光つてゐる。　再び旋回すると、秀麗な富士山が半身を見せて、「おめでたう。」と呼び掛けてゐる。　單獨旗は、風に吹きちぎられるほどひるがへりながら、「がんばれ、がんばれ。」と應援をする。

ふと見おろすと、飛行場は一枚の色紙か何かのやうに小さい。あそこでは、教官も、教員も、仲間も、みんな私を見てゐるのだ。　しつかり飛ばなくてはと、心が引きしまる。　私が、まだ國民學校にはいつたばかりの頃だつた。　三機編隊で飛んで行く飛行機を見て、「あゝして空が飛べたら、どんなに愉快だらう。　どんなに勇ましいだらう。」と見とれたものだつた。　それから、圖畫にはよく飛行機をかいた。　自分がこの學校に志願したのも、あのをさな心の感銘が、さうさせたのかも知れない。

規定のコースを一巡して、下降する。　機首に氣をくばりながら空中滑走し、滑り込むやうに三點着陸をする。　自分ながら、氣

持のよい着陸ぶりだつた。すぐ安全帶をはづし、落下傘を取りのけ、愛機からおりて分隊長の前に進んだ。

「單獨歸りました。」

と大聲で報告をする。分隊長は、微笑をたゝへてうなづかれる。

私には、それが無限の激勵のやうに見えた。

名札をもとに返して席にもどると、教員が、

「うまくやつたぞ。」

といひながら、肩をたゝかれた。親身になつてこれまでに教へられた教員のありがたさが、しみ〴〵と胸にこたへた。

この日の飛行練習を終へてから、分隊長は、次のやうな講評をされた。

「單獨着陸の樣子を見ると、まだ十分ではない。機首を起し足りない者があり、逆に上げ過ぎる者もある。これは、操縱の拙劣にもよるが、第一、腹のすわりが惡いからだ。」

次に、教官から注意があつた。

「今日、單獨飛行を許されなかつた者もあるが、落膽することはない。一日でも多く、教員から學ぶ機會が與へられたと思つて、更に奮發することだ。又、單獨飛行の許された者は、慢心を起してはいけない。慢心を起せば進歩は止る。着實にやる者だけが、最後の勝利を得るのだ。」

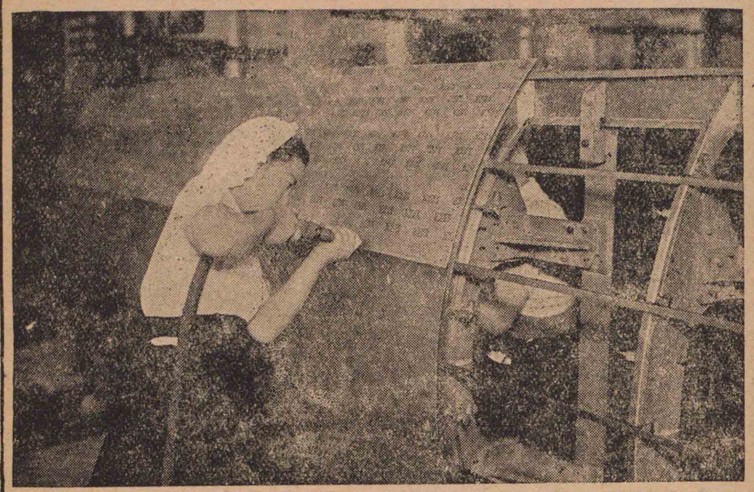
私はこれを聞いて、ふと、この春卒業した先輩のことを思ひ出した。さうして、北に南に、勇ましい若鷲として目ざましい活躍

をしてゐることを考へ、私たちもその後に續く者として、りつぱな空の勇士となることを、堅く誓はないではゐられなかつた。

三　鋲を打つ

〇月〇日

四時半起床。いつものやうに、みんなで寮をきれいに掃除する。今日は一日氣持がよかつた。作業前の體操も、行進も、愉快だつた。日頃は何とも思はないみんなの作業服や、作業帽まで、かひ〳〵しく見えた。一つの目當てに向かつて心魂を打ち込む光景は、こんなにも美しいものかと思ふ。工場から湧き立つ音響は、盛りあがる日本の力強い呼吸のやうに聞えた。



今日も一日、エヤーハンマーをしつかり握つて、何百となく、何千となく鋲を打ち込んだ。この鋲は、爆撃機の胴體下面覆ひを作るために打ち込むのだ。打ち込み方が惡くて、繼ぎ合はせたジュラルミンの部分品が、空中分解でもしたらどうする。一つの鋲でも、おろそかに打つことはできない。「しつかり頼みますよ」と祈る私の心に答へるやうに、ジュラルミン板は凄い響きを立てる。今日は、おかげで一本の鋲もしくじらなかつた。

去年の今頃は、エヤーハンマーをかゝへることも怖しく、打つには打つても、打ち過ぎてしまつたり、打ち足りなかつたり、曲げてしまつたりしたものだつた。今から思へば、これも一つの思ひ出だ。熟練はありがたい。とにかく、今日は一日樂しかつた。

〇月〇日

今日も鋲打ち。朝から頭が重かつたが、午後になると、いつの間にかなほつてゐた。病氣のために、もし鋲打ちを失敗して、せつかくの部分品を廢物にしては、申しわけがない。私のところへ屆くまでに、ずゐぶんいろ〳〵な手數がかゝつてゐるのだ。製圖・切斷を經て、鑢(やすり)がかゝり、型に當てて、丹念に曲げたり延したり、寸分の狂ひもないやうに整へられて來たものを、どうしてこでむざ〳〵と廢品にしてよからう。この一念に、病氣などは吹き飛んでしまふのだ。

寮に歸ると、みんなが夕刊を見てゐた。爆擊機の編隊が、今しも雲の上を進んで行く寫眞が出てゐる。みんなは、何にもいはずに唯見とれてゐた。ひと事のやうには思へない。心から、武運長久をお祈りするばかりである。

〇月〇日

今日、胴體の下面覆ひが組み立てられた。いつも思ふことだが、出來上つてみると、意外に大きなものである。疊六七枚はらくに敷ける。これが、爆擊機の腹のところを包むのだ。つまり爆擊機にとつては、金時さんの腹掛けである。積み込んだ爆彈

をしつかりと包み、いざ目的地といふ時に、この腹掛けを兩方に開いて、思ひきり爆彈を投下するのだ。

製圖の友だちも、切斷や旋盤の友だちも、みんな出來上つた下面覆ひを見に來る。さうして、思はず手で撫でてみる。この腹掛けを掛けた爆擊機は、どれほど大きなからだだらう。それが日の丸を附け、がつしりと翼を張り、發動機を響かして悠々と飛んで行く姿は、想像するだけでも頼もしい。

○月○日

こんな夢を見る。

よい月夜である。どこからか、白い蝶が飛んで來た。その蝶が、時々銀色にひらめく。「蝶ぢやありませんよ。あなたの飛行機ですよ。」といふ聲がする。よく見ると、月に照らされて、あの腹掛けもちらつと見える。「さあ、お乘りなさい。」――私は、浦島太郎が龜に乘るやうな氣持で、いそ〳〵と乘り込む。いきなり宙を飛び出す。星に手が屆きさうだ。「わたしは、あなたに打つてもらつた鋲ですよ。」「わたしも。」「わたしも。」――星の群れがこんなことをいふ。風のうなりだか、プロペラの響きだか、烈しい物音がするが、それも遠のいて行く。と、急に眠くなつて、私はたわいもなく眠つてしまふ。「よく眠つてゐること。」と、さゝやく聲が聞える。確か、母の聲であつた。

○月○日

久しぶりに、母から手紙が來る。元氣で暮してゐること、今度

末の妹も働きに出たので、母は一人ぼつちになつたこと、その働くところが落下傘製作の工場であること、すぐの妹は從軍看護婦だし、これで三人の姉妹が、それ〴〵お役に立つたこと、うちには男の子はゐないが、母は肩身が狹いとは決して思つてゐないこと、今年、國民學校に入學した隣りの五郎さんが、大き〳〵なつたら、私の造つた飛行機に乘るんだといつてゐること、その時は、末の妹の落下傘を着け、もし名譽の負傷をしたら、すぐの妹になほしてもらふのだといつてゐることなどが、おもしろく書いてあつた。

〇月〇日

今まで晝間勤務だつたのが、今日から夜間勤務になる。眠くなりはしないかと案じてゐたが、そんなことはなかつた。深夜、この工場だけが、うなりながら活動してゐるのを見ると、いかにも鎬（しのぎ）を削る生産戰のさ中に立つてゐるといふ感じが、ひし〳〵と迫る。眠氣どころではない。

この間、組み立てた胴體下面覆ひが、爆擊機に取り附けられて、すぐ出陣して行つたさうだ。私たちの仕事は、文字通り第一線の延長である。職場は直ちに戰場であり、鋲を打ち込む力は、まさに日本を守る力なのだ。

夜明け頃に、雨がさつと來た。

四　田園の曲

落日

野は、里は、たそがれそめて、
連なれる山のいたゞき、
かゞやかに光にほへり。

あや雲の波たゞよひて、
大いなるくれなゐ色の
もゆる日は、今し落ち行く。

ことばなく眺めてあれば、
わが胸の奥にぞとほる、

落つる日の尊き光。

月と草木とのさゝやき

いつしか雨はれて明かるき空よ、
さえ〴〵と美し、
ぬれたる月の光。

まばらなる立木の枝より、
雫の落つる音しげく、
なほ降れる雨かと思ふ。

一もとの老木の根株、皮むけて
身をあらはせるに、
照りたる月は鏡のごと。

水白く流るゝ橋を
わが行けば、
わが影はあり、水の上に。

われは聞く、こよひ
月と草木のさゝやくを、
白き魂の聲するを。（三木操ノ作ニ據ル）

朝

霧はれて行く遠近（をちこち）に、
黄金の村はあからみぬ。

和らぐ聲は起り來て、
谷の底より立ちのぼる。

きらめく露は日をむかへ、
今日新たなる幸を吸ふ。（三木操ノ作ニ據ル）

五　級會で話したこと

私は、今日のこの級會で、百姓になるといふことを、皆さんにお話しようと思ひます。

その前に一つ前置きとして、お話しなければならないことがあります。この夏ひでりが續いて、お米の收穫があれほど心配されたのにもかゝはらず、思つたよりも好成績で、稻刈も無事にすんだことは、皆さんも既に御承知の通りであります。

ところで、この七月の初めでありました。學校からの歸途、一人の友人と一しよに家路へ急ぎました。嚴しいひでりだつたので、田は一面水がなくなり、稻も大變弱つてゐました。あちこちで、雨乞ひをしましたが、ほんたうに雨でも降らなければ、みんな枯れてしまふばかりでした。

四五町ほど歩いて行つた時、向かふに青々と元氣よく稻の育つてゐる田が見えました。廣さは、せい〳〵一段歩か一段五畝ですが、それは、今私と一しよに歩いてゐる友人の家の田であります。周圍の田に比べて不思議なほど、みづ〳〵しく見えます。さうして、その田の側に、村長さんと縣廳の人が、立ちながら話をしてゐました。

「この田は、不思議によく出來てゐる。」

と、縣廳の人が村長さんにいひますと、

「あれは、感心な家の田です。」

といひながら、ちやうど通り合はせた私の友人をさして、

「さう〳〵、この子のうちの田ですよ。」

と附け加へました。

「君のうちの田か。大變成績がいゝね。どうしてかうなのか、話してくれたまへ。」

と、縣廳の人が聞きました。友人は、にこ〳〵してゐるばかりで、別に答へようともしません。私が側から、

「だまつてゐないで話したまへ。」

と小聲でいふと、友人はぽつ〳〵話しだしました。

「私の父は、この春苗代の種蒔きがすんだ頃、應召しました。母と二人で、その後を引き受けて、田や畠の仕事をしてまゐりました。すると、かうしたひでり續きなので、私は、毎晩井戸から水を汲んでは田へ流し込みました。お國の寶を枯らしては、すまないと思つたからです。それに、稲がりつぱに育てば、父もきつと喜んでくれると思つたからです。唯それが母にわかつては、かへつて心配をかけると思ひましたので、毎晩母が眠つてから、水汲みをしました。」

「それは感心だね。この田がこんなによく出來たのも、君の眞心が通じたのだ。ありがたい話を聞かせてもらつた。」

と、縣廳の人は、感動しながら友人の手を取りました。友人の手には、まめが一ぱい出來てゐました。

「さうだ、村の人たちも、一つ君の意氣込みでやつてもらはう。

どうしても、稻を助けなければならない。」

と、村長さんも力強くいはれました。

この事がわかつてから、村の人たちは、目ざましく働き始めました。その上、やがて雨も降つて、村の田は生き返つて來ました。この秋の收穫が思つたよりも好成績であつたのは、全く私の友人のけなげな働きがそのもとをなしてゐるのだと、私は思ひます。さうして、その友人といふのはほかでもありません、私たちの級友中村君であります。

こゝまでお話すれば、私がどうして百姓にならうと決心したかは、おのづからおわかりのことと思ひます。私の家も、御存じのやうに農家ですが、田といひ、畠といひ、ほんの僅かあるに過ぎ

ません。しかし、私一家にとつては、かけがへのない大切な土地であります。

日露戰爭に出征して旅順攻擊に參加した祖父も、こゝから征途に就きました。開拓民となつて大陸に渡つた叔母も、こゝから出かけたのであります。今、南の空ではなぐしく戰つてゐる兄も、やはりこの土地から出發いたしました。先祖以來この土地に生まれ、この土地に住み、さうして、この土地で死にました。つまりこの土地は、私の家の生きた歷史を物語つてゐるのであります。この尊い田や畠を受け繼いで、これをりつぱなものにして行きたいといふのが、私の百姓を志す一つの理由であります。

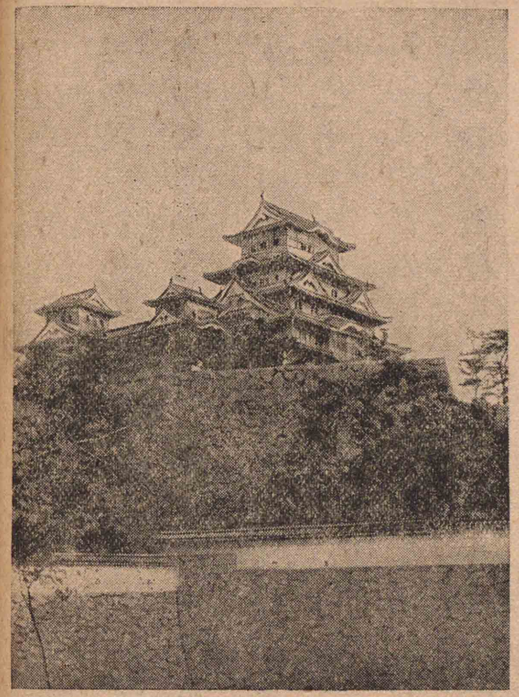
但し、かういつた小さな自分の家の感情だけに、動かされたのではありません。なるほど、田や畠は先祖傳來のものであり、現に、私の家の者たちが耕したり、種を蒔いたり、收穫したりしてゐます。しかし、よく考へてみると、この土地はもと〳〵日本のありがたい國土であります。神が生み給ひ、しろしめし、永遠に守ります尊い國土であります。たとへ、少しばかりの田や畠であつても、それは、この國の寶として考へなければならないものであります。

隨つて、四季折々の作物は、私の家の物でありながら、その實、神の恵みを受けたお國のありがたい作物であります。先日も、米を少しでも多く供出するやうにとのお達しがありましたが、これは全く當然のことでありまして、私は、こんなお達しを頂く前に、お國のために差し出さなければならないと思ひます。今、日本は國運を賭しての決戰の最中であります。前線の勇士たちに、ひもじい思ひをさせてはなりません。米一粒でも、いも一つでも、多くたべてもらひたいと思ふ心で一ぱいであります。これが、私の百姓にならうとする第二の理由であります。

今日の級會で、加藤君は少年航空兵に、藤井君は通信兵に、野田君は産業戰士になる話をしました。これらの人たちは、皆外へ出て勇ましく働いてくれます。そこで、私は、中村君とともにこの土地に踏みとゞまつて百姓になり、食糧增産に專念して、みんなの腹ごしらへを十分にしてあげるのが、お國への御奉公だと

考へてみるのであります。

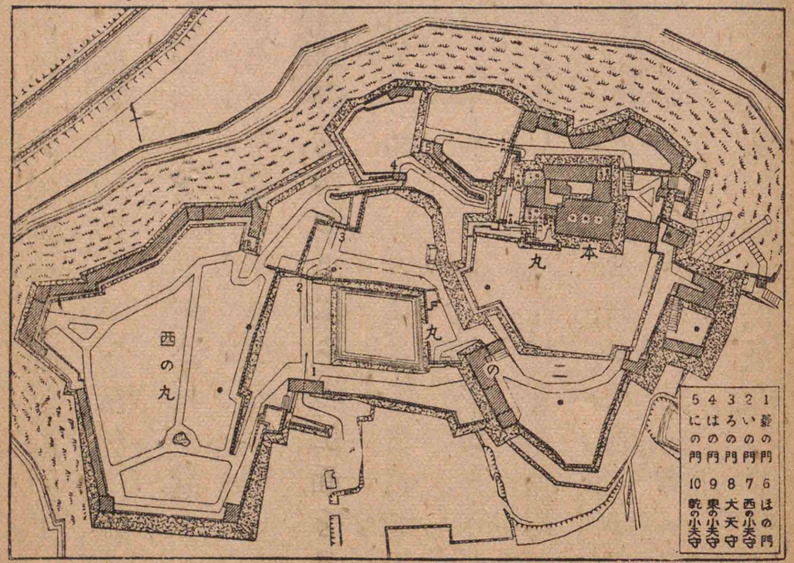
六　姫路城



大手の櫻門から三の丸にはいると、姫路城の天守閣は、姫山の老松の上にその正面を見せる。まことに白鷺城の名にそむかない、美しい姿である。しかも、その美の極致を、私は、菱の門をくゞつて二の丸にはいつた瞬間に見出した。

空堀を隔てて、やゝ右手に仰ぐ天守閣群は、五層の大天守を右に、三層の西の小天守を中に、同じ三層の乾の小天守を左に、いかにも調和よく、高い石垣の上に聳えてゐる。みやびやかな唐破風、すつきりした千鳥破風、それらが上下に重なり、左右に並び、千鳥がけに入りちがふさまは、まさにいらかの亂舞といひたい美しさである。

ところで、更に「いの門」をくゞり、



「ろの門」をくゞつて、奥へ〳〵と進むにつれ、姫路城は、唯美しいといふだけではすまされなくなつて來る。門をくゞるたびに、坂道は必ず右か左へ曲折する。道に沿つて、時に石垣・塀・櫓が、層々と頭上にのしかゝる。まるで、絶壁の下を通るかたちだ。さうして、その塀や櫓にうがたれた矢狭間・鐵砲狭間が、圓形に、三角形に、長方形に、ちやうど怪物の目のやうに、私たちを見おろすのである。どんな大軍が押し寄せたとしても、この狭い谷底のやうな迷路へ導かれ、あの無數の狭間から撃ちかけられ、射すくめられては、全くたまつたものではない。しかも、道の行く手行く手は、總べて嚴重な門である。

門をはいると、多くはそこに廣場がある。一般に本丸への道

は狭く、曲折してゐるから、敵の寄せ手がもし門を突破すれば、差し當りかうした廣場へなだれ込むに違ひない。さうして、激しく押し合ひもみ合ふかれらの足もとには、意外にも、深い谷底が口をあけて待つてゐるのである。寄せ手が勢込めば勢込むほど、恐らくこの見せかけの廣場が役立つに違ひない。

一きは堅固に見える「ほの門」を過ぎて、いよ〳〵本丸にたどり着いたと思ふと、そこには、いはゆる水の門が、第一から第六まで、

順々に待ち受けてゐる。數歩にして門があり、殆ど門ごとに道が曲折する。頭上には乾の小天守、西の小天守、及び大天守が、東の小天守と四つ目に並び、互に腕を組み合つて天に聳えながら、私たちを、足もとにも寄せつけないといつたかつかうをしてゐる。

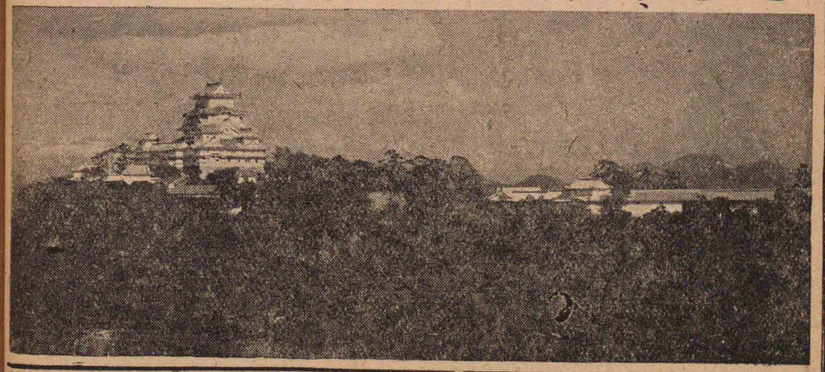
水の第五門は、大天守と西の小天守とを繫ぐ渡り櫓の眞下になつてゐる。一たびこの門をしめ切つたら、四つの天守閣は一箇の獨立した城廓となつて、これだけでも數萬の敵に對し、いつかな動きさうにない。

外觀五層の大天守は、内から登ると七階であつた。さうして、あの美しいと見た天守の内部には、巨材と巨材が組み合つて、薄暗い各階にもの凄く力闘してゐる。

最上階から眺めると、姫路市街はもとより、飾磨の平野が一目に見渡される。元來この城は、平野の中央、やゝ北寄りの姫山・鷺山に據つて營まれたもので、地は南に飾磨港を控へて瀬戸内海の運輸を占め、西に中國街道を受けて、交通の要路に當つてゐる。秀吉がこゝに目を着けて城を築き、更に家康に信任された池田輝政が、百萬石の威勢と、將軍のうしろだてとによつて、今日に見る優美なしかも、堅固極りないものに造り上げた。大手の門は南を固め、からめ手の門は北東を押さへてゐるが、この城の要害はむしろ西にある。眼下に見る西の丸の櫓々は、鷺山をあたかも長城のやうに覆つて、西からの見すかしを防いでゐる。呼べ

ば答へる間近さに、男山・景福寺山が、ちやうど海中の小島のやうに散在してゐる。いざといへば、これらの小山が總べて出城となつて、この城廓の護りとなるのである。中國・四國の大藩を目の上のこぶと見た家康が、輝政をしてこゝに金城鐵壁を築かせたのは、まことに故あることと考へさせられる。

南方、もしくは東方から望めば、優美そのものと思へる姫路城も、これを北から西から望む時、まるで樣子を一變する。本丸の據る姫山、西の丸の據る鷺山は、屏風の如く連なり、麓



に三條の堀をめぐらし、斧を知らぬ密林に覆はれ、その上にそゝり立つ天守閣は、あたかも司令塔の如く、數十の櫓は層々と重なり蜿蜒と連なつて、まさに飾磨の平野に浮かぶ一大戰艦を思はせるものがある。

美しい城だとは、誰もいふ。しかも、姫路城は、當時の最も堅固な城であつた。更にいへば、本丸・二の丸・西の丸の三丸が、これほどまで完全に殘つて、今日のわれ〳〵に、昔の姿を殆どそのまゝに見せてくれる。まことに姫路城は、わが國城廓建築の粹であり、世界に誇るべき國寶である。

七　旅の思ひ出

阿蘇の夕べ

山を下つて村に出た時は、もう日が暮れて、夕闇ほの暗い頃であつた。村の夕暮のにぎはひは格別で、壯年男女は一日の仕事のしまひに忙しく、子供は薄暗い垣根の陰や、かまどの火の見える軒先などに集つて、笑つたり、歌つたり、泣いたりしてゐる。これは、どこの田舍も同じことであるが、今荒涼たる阿蘇の草原からかけ下りて、突然この人里に出た僕は、しみ〴〵とこの光景に心を打たれたのである。僕ら二人は、疲れた足を引きずつて、日暮れ、道遠きを感じながらも、なつかしいやうな心持で、宮地をこよひのあてに歩いた。

一村を離れて、林や畠の間を暫く行くと、日はとつぷり暮れた。

西の空をふり向くと、阿蘇の分脈の一峯の右に新月がかゝつて、一帶の村落をわが物顔に、青みがかつた水のやうな光を放つてゐる。頭上を仰ぐと、晝間は眞白に立ち昇る噴煙が、月の光に灰色に染まつて、夜の大空を衝いてゐるさまが、いかにもすさまじく、又、美しかつた。たま〳〵橋にさしかゝつたから幸ひと、その欄干により掛かつて、疲れきつた足を休めながら、二人は、噴煙のさまのいろ〳〵に變化するのを眺めたり、聞くともなしに、村落の人語の遠くに聞えるのを聞いたりしてゐた。すると、今來た道の方から、空車らしい荷車の音が、林などに反響しながら次第にこちらへ來るのが、手に取るやうに聞えだした。

暫くすると、朗かな澄んだ聲で歌ふ馬子唄が、空車の音につれ

てだん〳〵と近寄つて來た。僕は、噴煙を眺めたまゝ耳を傾けて、この聲の近づくのを待つともなしに待つてゐた。

人影が見えたと思ふと、「宮地よいところぢや阿蘇山ふもと。」といふ唄を長く引いて、ちやうど僕らが立つてゐる橋の少し手前までやつて來た。その唄と聲とが、どんなに僕の感情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な若者が、手綱を曳いて、僕らの方を見向きもしないで通つて行くのを、僕はじつと見つめてゐた。夕月の光を背にしてゐたから、その横顔もはつきりとは知れなかつたが、そのたくましげなからだの黑い輪廓が、今も僕の目の底に殘つてゐる。

僕は、若者の後影をじつと見送つて、さうして、また阿蘇の噴煙を見上げた。（國木田哲夫ノ文ニ據ル）

由良の夜

春の夜は靜かにふけぬ。
うまや路の並木のけぶり、
箱馬車はわだちをどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

おぼろ夜の窓のあかりに、
京むすめ、難波あきうど、
尼法師や、切戸まうでや、

人の世の旅の道づれ。

物語あくびまじりに、
眠り目のとろむとすれば、
たが子にか、後(しりへ)の方に、
をりからの追分節や。

清らなる聲ひとしきり、
谷あひにさゝらぐ水の、
咽び音に響き渡れば、
乘合は涙こぼれぬ。

月落ちてやみの夜ぶかに、
箱馬車は由良に着きけり。
人々は車を降りて、
西東、路に別れぬ。

そののちや幾春經けん、
おぼ方は夢にうつゝに、
忍びてはえこそ忘れね、
由良の夜の追分上手。

その子、今いづくにあらん。
思ひ出の清きかたみや、
人々の心に生きて、
とことはに姿ぞ若き。（薄田淳介ノ作ニ據ル）

八　輸送船

月のよい夜。父が新聞を廣げてゐる。つゆ子が國語の本を讀んでゐる。その側で、母が編物をしながら、それを聞く。二郎が机に向かつて、一心に何か書き續けてゐる。どこかで、蟲の鳴く聲。

つゆ子「おかあさん、もう一ぺん讀んでみませうか。」

母「讀んでごらん。いゝ歌ですね。」

つゆ子、本を持ち、聲を少し高めに讀む。

つゆ子「ちんちろ松蟲　蟲の聲、
庭の畠で　鳴きました。
ぎんぎら葉の露、草の露、
月の光が　ぬれました。
とろ〳〵もえる火、ゐろりの火、
栗がはぜます、にほひます。」

父「今夜はその歌の通りぢやないか。庭の木の葉に月が光つ

てゐるし、それに、蟲もよく鳴いてゐるし。」

母「ほんたうに靜かな夜ですね。」

つゆ子「こんな靜かな夜でも、南の方では、烈しい戰がありますのね。」

父「さうだ。かうして、こゝで靜かに暮せるのも、遠い所で、日本の兵隊さんが敵を追ひ散らしてくださるおかげだよ。つゆ子、わかるかい。」

つゆ子「わかります。」

この時、二郎はペンを置いて、

二郎「やつと書きあげた。」

父「二郎は、何を書いてゐたのだ。」

つゆ子「一郎にいさんに、お手紙を書いてゐるんですつて。」

父「さうか。一郎も、今頃は、どこの海でこの月を眺めてゐるかな。」

つゆ子「一郎にいさんが、どこにいらつしやるかわからないのに、お手紙を書くなんてをかしいですねえ、おかあさん。」

二郎「ちつともをかしくないさ。どんな所へ行かれても、心はちやんと繋がつてゐるんだ。向かひ合つてお話するやうなものさ。をかしくないぢやないか。」

母「どれ、讀んでごらんなさい。」

二郎、大きな聲で、手紙を讀みあげる。

二郎「にいさん、お元氣ですか。今夜のやうな靜かな晩でも、にいさんは、輸送船で活躍してゐられるのですね。いつか、輸送

船は、日本の動脈だといはれたことを忘れません。私も高等科を卒へたら、海員を志願するつもりです。うちでは、みんな丈夫です。今、つゆ子は、國語の本を讀んでゐます。おかあさんは、編物をしていらつしやいます。にいさんに送るのださうです。では、くれ〳〵もおからだをお大事に。さやうなら。

つゆ子「あら、たつたそれつきりなの。」

二郎「これでおしまひさ。」

つゆ子「あつけないこと。」

二郎「お前のやうに、手紙を書かないよりはいゝぢやないか。」

母「つゆ子の負けですね。今度は、つゆ子も手紙を書いておあげなさい。」

つゆ子「私は、いつもちやんと、心でにいさんとお會ひして、お話をしてゐるんですもの。だからいゝの。」

二郎「魔法使ひぢやあるまいし、つゆ子の思つてゐることなんか、一郎にいさんに屆くものか。」

この時、玄關の呼び鈴が鳴る。つゆ子が取次に出て行く。

「あら、一郎にいさん。」「たゞ今。」「まあ、今、にいさんのお噂をしてゐたところよ。」――こんな聲が聞えて來る。二郎がとび出して行く。やがて、一郎の手を、二郎とつゆ子が引いて來る。

一郎「おとうさん、おかあさん、たゞ今歸りました。」

父「おゝ、元氣でよくもどつたね。」

母「まあ〳〵。お歸りなさい。」

母、じつと一郎を見る。

一郎「今朝、入港したのです。船長からお許しが出て、二時間だけ暇を頂いたものですから、どんで歸つたところです。」

つゆ子「あら、たつた二時間。つまらないわ。」

一郎「そんなわがまゝをいふもんぢやないよ。ほんたうは、歸れないほど忙しいのだ。さう〳〵、おかあさん。」

母「何ですか。」

一郎「私の船で、一しよに働いてゐる少年をつれて來たのですが、こゝへ通してもいゝでせうか。」

母「いゝとも、いゝとも。すぐおつれして——」

一郎、出て行つて少年をつれて來る。少年は、行儀よくみんなに挨拶をする。

一郎「野村君です。この春、國民學校の高等科を出て、すぐ海員募集に應じて船に乘り込んだのです。野村君の家は、こゝからずつと遠い山國です。それで、家に歸る暇もないので、うちへつれて來ました。野村君は、なか〳〵勇敢な少年ですよ。」

父「さうか。野村君、よく來てくれましたね。さあ、ゆつくりして——」

つゆ子「ゆつくりなんか、できませんね。たつた二時間ぢや。」

一郎「またそんなこと。」

母「つゆ子、これを皆さんに――」

といつて、紅茶を出す。つゆ子、それを運ぶ。

母「ちやうど今日、お砂糖の配給がありました。」

みんな紅茶を飲む。蟲の聲。

二郎「あ、おいしい。」

つゆ子「にいさん、こんなお砂糖だつて、みんなお船のおかげでせう。」

一郎「その通り。僅かの砂糖のやうにみえるが、大變なのだ。日本の人たちがなめるために、五千トンの船が、五隻六隻、ひつきりなしに運ばなければならない。砂糖でさへさうだ。まして分量の多い石炭や米・重油・ゴム・ボーキサイドなどを運ぶには、まあ、どのくらゐ船がいるかわからないよ。勝つためには、一にも船、二にも船、三にも船。」

二郎「四にも船、五にも船でせう。」

一郎「さうだ、さうだ。おとうさん、蟲が鳴いてゐますね。松蟲でせう。靜かですね。海の靜けさとはまた別だな、野村君。」

野村は、につこりする。

父「一郎、お前が小さい時に、よく『あれ松蟲が鳴きだした。』とかいふ唱歌を歌つたものだが、どうだ、ひとつ思ひ出して歌つてみないか。」

一郎「ちよつとをかしいですよ、こんなに大きくなつて。」

母「今、つゆ子が國語の本を讀んでゐましたが、やはり松蟲のこ

とが書いてありました。」

つゆ子「それを讀んでお聞かせしませうか。にいさん。」

一郎「あ、讀んでちやうだい。」

つゆ子、立つて「秋」を讀む。

一郎「ありがたう。上手々々。つゆ子も、もうそんなきれいな、い詩を讀むやうになつたのかなあ。早いものですね、おかあさん。」

母「ほんたうに早いよ。何といつても、一郎さんが、もう一人前になつてゐるのですもの。」

父「野村君。どうだ、紅茶をもう一ぱい。」

野村「はい。」

一郎「おとうさん、野村君は、山國出身なのに、海にも船にもすぐなれて、見張りでも、甲板洗ひでも、それはうまいものですよ。」

父「それは感心だ。」

つゆ子「船におよひになりませんか。」

野村「初め一週間ばかり、何だかへんでしたが、すぐなれてしまひました。なれたら、搖れるのがかへつて愉快ですよ。」

二郎「さつき、にいさんが、野村さんは勇敢だといつたでせう。その話をして——」

一郎「さう〳〵、こんなことがあつた。南方のある地點へ敵前上陸をする時だつた。うまく敵の岸に近づいて、ちやうど上陸をしようといふ時、敵機がやつて來て盛んに爆擊をする。

こちらは、舟艇でどん〳〵陸揚げをやる。すると、近くに落ちた爆彈の爆風に煽られて、舟艇が顚覆した。乘つてゐた兵隊さんが、海中に沈む。あの重い武裝なので、容易に浮かび上れない。これを見た船員たちは、次々と海へ跳び込んで、水中にもぐつて、兵隊さんの踏臺になつて救ひ上げました。その時です、眞先に海に跳び込んで行つたのが、この野村君。

父「ほう、それは大變なお手柄だつた。」

母「山國だとおつしやるのに、水泳もお達者なのですね。」

二郎「えらいな。敵襲を受けた時は、どんな氣持ですか。」

野村「あの時は、別に何とも思ひませんでした。日頃、私たちは、任務をやり遂げるまでは死んではならないと、嚴しく教へられてゐます。死ぬよりももつと重い使命があつて、それを果すまでは、もう夢中です。敵機が來ようが、爆彈が落ちようが、氣にかけてはゐられません。」

一郎「その通りだ。死以上の覺悟を、船員たちは皆持つてゐるのだ。」

野村「何も私がえらいとか、勇ましいとかいふのではありません。一足先に跳び込んだだけのことで、それより一郎さんは、もつともつと勇敢なことをやつてゐます。」

一郎「何もないよ、そんなこと。」

野村「ほら、あのガソリン樽の話。」

一郎「何だ、あんなこと。當り前ぢやないか。」

つゆ子「なあに、そのガソリン樽つて。」

野村「お話してもいゝでせう。」

一郎「話すほどのことでもないさ。」

つゆ子「聞かせてください。」

二郎「僕にも聞かせて——」

野村「かうなんです。私たちの輸送船が進んで行くと、不意に敵機の襲來を受けました。さうして、爆彈の一つが甲板に當つて、甲板に並べてあつたガソリン樽に、ぽつと火がつきました。これが、ほかの樽に燃え移つたらそれこそ大變で、全甲板は、たちまち火の海になるばかりです。すると、いち早く一郎さんが跳び出して行つて、濡れ筵で、ぼう〳〵燃えてゐるガソリン樽に抱きついて、海へころがしながら落してしまつたのです。おかげで船火事を免れて、みんなが救はれました。あの時の一郎さんは、まるで不動さんみたいでしたよ。」

つゆ子「一郎にいさんが不動さんだなんて、をかしいわ。」

野村「その時は、笑ひどころではありませんでした。あの早業、あの勇敢さには、みんな驚きました。」

父「うむ、一郎もなか〳〵よくやるね。」

二郎「にいさん、熱かつたでせう。」

一郎「火は熱いものにきまつてゐるよ、あはゝゝ。」

母「でもまあ、よかつたこと。」

つゆ子「やけどはしませんでしたか。」

一郎「あんなことで、やけどをするやうなにいさんぢやないよ。にいさんたちは、一旦港を出たら、油斷も隙もないわけさ。濃霧がある。颱風がある。怒濤がある。おまけに、いつ敵機が空から押し寄せるかも知れない。潛水艦が、ひよつこり顔を出すかも知れない。」

つゆ子「困りますね。」

一郎「軍艦なら、幾ら敵が來たつて平氣で應戰するが、輸送船では、どうにもしやうがない。大事なものを運ぶのだから、むちやなことはできない。それで航路を變へて、あまり船の通らない道を進んで行くことになる。すると、そこには暗礁があつたり、淺瀨があつたり――」

つゆ子「どうしても、そんなあぶないことをして通はなければならないのですか。」

父「今度の戰爭は、初めから海の向かふでの戰だから、戰線と銃後とをしつかり結び附ける生命の綱が、輸送船なのだ。野村君も一郎も、この生命の綱の一筋になつて、身を捧げてゐるわけなんだ。」

つゆ子「そんなに一郎にいさんたち、えらいの。」

一郎「これは、驚いたね。おかあさん、私たちがいつも船で歌つてゐる歌を、お聞かせしませうか。」

母「歌つてください。久しぶりね、お前の歌を聞くのは。」

一郎「野村君。『日のもとの』の歌を一しよに歌はう。」

野村一郎「日のもとの
をのことわれも
うたはれん、
いづくの波に
くだけ散るとも。」

二度くり返して歌ふ。二郎とつゆ子拍手。

母「いかにも海國男子らしい、いゝ歌ですね。」

二郎「誰が作つたの。」

一郎「作者は不明さ。二十年ほど前から、これが海員たちの口にのぼつて、今も盛んに歌はれてゐる。みんな集つて何かといふ時には、きつとこの歌が自然に出て來る。二郎、お前も何か歌つて聞かせないか。」

二郎「何を歌はうかな。さう、あれを歌はう。」

といつて立ち上り、「われは海の子」の唱歌を歌ひだす。つゆ子も、聞き覺えのまゝ合はせて歌ふ。一郎も野村も合唱。父と母とは、笑顔で聞く。この時、警戒警報が鳴りだす。

二郎「あ、警報。」

つゆ子「警戒警報。」

みんな唱歌をやめる。警報がまだ鳴つてゐる。母は電

燈の處置をする。

父「あわてることはない。二郎も、つゆ子も、服裝の準備はいゝね」。

二郎つゆ子「はい、大丈夫です。」

一郎「確かに警戒警報だ。僕たちもかうやつてはゐられない。船に歸らなくちや。野村君、出かけよう」。

つゆ子「まだ、時間がありますよ。一時間もたつてゐません」。

一郎「いや、にいさんたちは、船を守らなくちやならない。また來る。今度はゆつくりするよ」。

つゆ子「ほんたう。にいさん」。

一郎「ほんたうだとも」。

父「一郎は、一時も早く行くがいゝ」。

一郎「行つてまゐります」。

野村「おじやまいたしました」。

一郎と野村は、みんなに挨拶をする。

母「では、氣をつけてね。お元氣で」。

二郎「野村さん、またいらつしやい」。

野村「ありがたう」。

母「何もおかまひしませんでしたね」。

野村「いゝえ、今夜は愉快でした」。

みんな急ぎめに立ち上り、玄關の方へ出て行く。戸外で「警戒警報發令」――と呼ぶ聲。

九　ハワイ海戰

一

日本・ハワイ間約四千海里――地球の周圍の約五分の一に當るこの長距離を突破しつゝ、わが航空母艦は一路東へ進んだ。

あと數日でハワイ附近に到達しようといふ頃、低氣壓が來襲した。ハワイ附近は、ふだんでも長濤の難所であるが、この低氣壓のために、艦の動搖は一層激しかつた。

「せつかく目的地へ到達しても、艦載機が飛べなくなるのではあるまいか。」

けれども、天佑はいつも人事の限りを盡くす皇軍の上にある。

こんな惡天候を冒して、よもや日本海軍が襲擊するなどとは、夢にもアメリカが想像しなかつたのである。

ハワイ攻擊部隊は、途中なんらアメリカの監視に妨げられることがなかつた。

旗艦の檣頭に、四色の旗が揭げられた。三十七年前日本海々戰に、皇國の興廢を荷なつたあの信號旗である。

ハワイ攻擊部隊全員は、甲板に整列してこの旗を仰いだ。

「各員粉骨碎身、その任務を完了せよ。」

航空部隊指揮官は、嚴然として訓示した。

その夜、ラジオのスイッチを入れると、ホノルル放送局の電波が傳はつて來る。浮き〳〵した調子の音樂、掛合ひ萬歲のやう

な劇場の中繼放送には、觀客の笑ひ聲さへ混つてゐる。あたかも土曜日の夜が、週末の享樂にふけて行くところであつた。

二

眞珠灣は、まだ眠りから覺めきつてゐない。

亂雲がすい〳〵飛んで行き、地上の高い建物には、拭ひきれない朝もやがまつはりついてゐる。

この乳白色の朝景色を切つて、さつと天空からかけ降りたわが海鷲の一隊があつた。フォード島の北岸の岩壁に足を掛けて、戰艦群の檣に一飛びで飛ぶやうなかつかうで——事實鳥であつたら、その通りするに違ひないが——途中海面すれ〳〵に降りて、しつかと抱いて來た魚雷を發射すると、早くも眼前に迫る檣を巧みに交して、ついと腹を見せながら大空へかけ上つた。

雷擊機隊の魚雷攻擊が始つたのである。

ど、ど、どーん。一瞬にして響く一大轟音は、遙かオアフ島の山並みまでゆすつて、靜寂はたちまち打ち破られた。

むく〳〵と、巨大な海魔の手のやうに、主力艦の舷側から眞白な水柱が立ち昇る。

五十メートル、百メートル、二百、三百——

その中途あたりを、燕のやうに腹を返して、雷擊機は次々と大空へかけのぼつて行く。

眞珠灣は狹くて淺く、その上標高千メートルの山嶺が、けはしく迫つてゐる。雷擊機隊に取つては、決して安樂な戰場ではな

い。編隊行動が困難なので、單機になつた。一機が魚雷の發射を行なふ。もの凄い水柱が天に冲する。それが靜まると、また次の一機が襲ひかゝる。水柱の中へ突つ込んだのでは、機體もろとも噴き上げられてしまふ。魚雷を胴腹に抱いて、大空で順番を待つ雷擊機は、或るものは海面すれ〳〵に、或るものは敵の胴腹二三百メートルの眞横まで接近して、こゝぞとばかり魚雷をたゝき込む。

白い雷跡を引いた魚雷は、眞一文字に敵艦のどてつ腹へ突進して行く。

一方、戰鬪機隊は大空を悠々と飛んでゐる。

「敵機は來ないか。」

今こそ、わが戰鬪機隊の腕前をアメリカに思ひ知らせるのだ。はる〳〵四千海里の波濤を越えて、敵を求めてハワイ軍港の眞上まで推參した戰鬪機隊である。

「見參、見參。」

われに挑戰する敵機があれば、一機も殘さず落してくれよう。オアフ島には、幾つかの海軍航空部隊と陸軍航空部隊があつて、その全機を合はせたら數百機にのぼるであらう。彈丸の續く限り、擊ちまくり斬りまくり、それでも敵機がしつこく抵抗すれば敵と刺し違へて、日本戰鬪機隊の最期をハワイのアメリカ人らに見せてくれるぞと、必殺必勝の戰鬪機は、怒れる鷲の如く爪を張り、目を八方にすゑて、アメリカ飛行機をさがし求めた。

けれども、わが方に挑戰するため、舞ひ上つて來るのは一機もなく、敵の對空砲火さへ一發も轟かない。

ハワイ軍港は、まだ迂闊にも眠つてゐる。

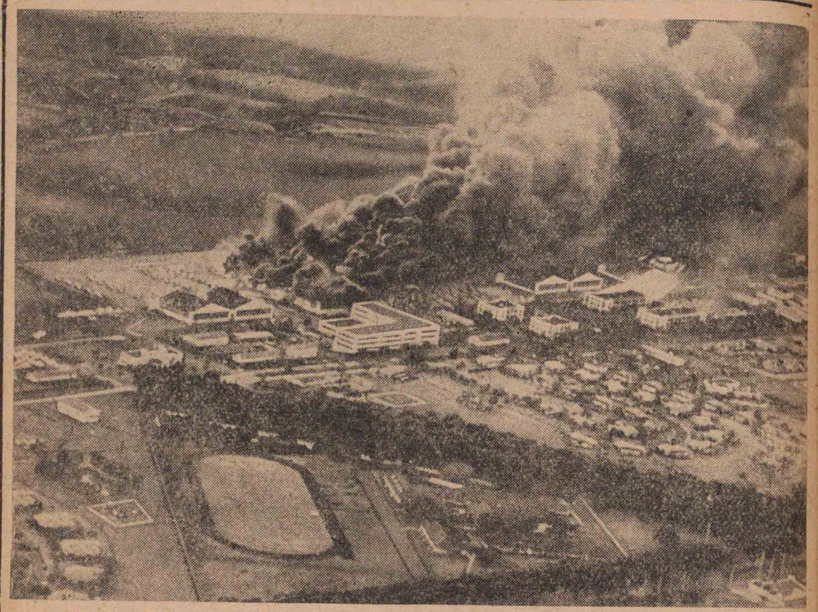
「われ、奇襲に成功せり。」

指揮官機から、赫々たる第一報が航空母艦へ飛んだ。

三

敵飛行場の格納庫や、飛行機も、同じやうにわが猛爆を受けて、紅蓮の焰を噴き上げてゐた。急降下爆擊機隊は、先づ、敵の航空部隊を襲つたのである。

フォード島の海軍航空基地は、陸上班と水上班があり、水上班基地には、なぎさにずらりと大型飛行艇が並んでゐる。沖合ひ



のわが艦隊に、もしも空から仇なすものがあるとすれば、それは航續距離を持つこの飛行艇隊である。

わが急降下爆擊機隊は、隼のやうにその上へ舞ひ降りた。

ガソリンを十分積み込んで、いつでも飛び立ち得る飛行艇は、必中の爆彈を受け、たちまちもくもくと黑煙を上げて燃え始めた。

ガソリンから上る黑煙は、さながら怪獸の巨大な舌のやうに、軍港の朝ぼらけをなめまはした。

戰鬪機隊も、挑戰する敵機なしと見てとるや、たちまち、地上の敵機の翼に止らんばかりの低空へ敢然と舞ひ降りて、地上の敵機を、一機々々、機銃彈で突き刺した。大空へ一機ものがすまいと、思ひきつて低空へ降りた海鷲の中には、敵の電線を引つ掛けて、そのまゝ母艦へ歸つたものもある。

太平洋艦隊主力艦の舷側はちぎれて空中に飛散し、敵機は地上でもろくも炎上し、標的艦ユタは胴腹をゑぐられて重油を海面に噴き出し、重巡洋艦は爆彈を受けて火炎を上げ始める頃、やつと敵の砲火は、わが航空部隊をねらつて炸裂しだした。

四

低氣壓のなごりは、標高千メートルのオアフ島山嶺にまだ殘つてゐた。

吹きおろす惡氣流に、わが荒鷲部隊の機體は、ぐら〳〵と動搖する。

いよ〳〵、大型爆彈を抱いた爆擊機隊の攻擊の時であるが、水平爆擊の照準がつきかねるので、悠々と旋回をやり直してゐる。

高角砲彈はだん〳〵烈しくなつて、上空は彈雲に鎖されたが、一念こもつた爆彈を何でむだに投下されようか。

從容として投下した第一彈は、ものの見事に敵艦の眞中に炸裂した。

敵の戰艦一隻は、この時早くも艦體を鮮やかに切斷され、大爆發を起して沈沒した。　空からの猛擊と、更に水中にひそんでゐて攻擊した、特別攻擊隊のあげた戰果であつた。

二隻づつ並んだ戰艦は、またとない絕好の標的である。一隊が片方をねらへば、他の一隊は殘りの戰艦をねらふ。　雷擊機が襲ひかゝつた後から、急降下爆擊機が殺到し、更に大型爆彈を抱いた爆擊機が續く。　擊沈するまでは、止めることのない連續攻擊である。

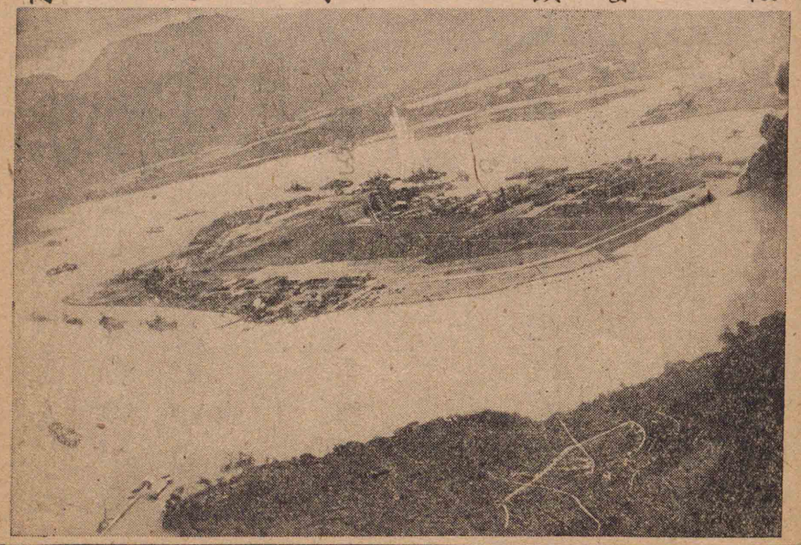
必殺を期する雷擊機の魚雷發射は、だん〳〵間近まで迫つて行なはれる。　並んだ二艦を、一つの魚雷で田樂刺しにするつもりか、力のこもつた魚雷が雷跡をあげて肉迫する一方、機首を立

て直さうとする雷擊機は、そこをねらはれて眞向から敵彈をかぶる。

たちまち、機體は一塊の火焰となる。　すると、火の玉となつた雷擊機は、再び機首を敵艦に向け、そのまゝ魚雷の跡を追つて眞一文字。　敵の甲板に火柱が立つのと、舷側から水煙が卷き起るのと同時である。

この頃から、わが方の損害も甚だしさを加へて來る。

大空で悠々敵をたふす順番を待



つてゐる爆擊機隊は、先づ、司令機が左胴體に大きな穴をあけられた。續く編隊機の中にも、ガソリンを噴き出してゐるのがある。爆擊が終つたら、敵艦目がけて自爆するつもりらしいこの爆擊機に、司令機が、

「狀況報ぜよ。」

と信號すると、

「補助タンクのみ。」

と、平然と答へる。「補助タンクだから、破損しても心配はない。」と、司令機に答へたのである。

戰鬪機の中には、機銃彈を最後の一發まで擊ちまくつた上、殘つてゐる敵の格納庫へ機體もろとも體當りをして、自爆した勇士がある。母艦へ歸らうと思へば歸ることのできる狀態にありながら、怨敵二十年、今ハワイの敵を眼前にして、醜の御楯となる好機を得たと思へば、擊つて擊つて擊ちまくり、それでも氣がすまず、遂に身體もろとも、命を護國の礎として捧げ盡くしたのである。

五

第一次攻擊部隊に引き續き、第二次攻擊部隊が母艦から飛び立つて、殘つた敵艦・敵軍事施設を痛爆した。特別攻擊隊のたゝきつけた必殺の魚雷とあひまつて、ハワイに在泊してゐたアメリカ太平洋艦隊主力は、一朝にして潰滅してしまつた。

十　亡きあと

母上へ

亡きあとの御歎きさこそと推しはかり、恐れ多く候へども、武士の母たる御方にて候へば、あまりに御歎きなさるまじく候。先立ちし友だちのどりわけ潔かりしはうらやましく、熱にをかされ氣を失ひ、いひがひなき死はくちをしくこそ覺え候へ。十五の歳の大病にて死ぬべきものの、仕合はせよく二十年來生きのびて、妻さへ子さへある身となり、思ひ遺すこともなく候へば、よく〳〵思し召しわけられ候うて、臆病なる事しでかして人に後指さゝるゝよりはと、御あきらめ下さるべく候。

なほ、幾久しく御すこやかに御暮しなされ、朝夕後世の御願ひ、肝要と存じ奉り候。

六月二十三日　　良藏

福原母上様

わが子へ

過ぎし暇乞ひの折から、返すがへすも母ありと思ふべからずと申し聞け候に、また立ち歸りわれを訪ひ候事、最も孝行に似たる不孝なり。とかく老いたる母が世にながらへてある故に、かゝる不覺を見るなれば、先づ、自ら先に死して義を教へ、武士の恥なからんことを示すなり。これも子を思ふの道なり。そなたも年五十に餘りぬれば、中老なり。申すには及ばず候へども、町人

百姓は、義不義によらず命を大切にして、父母をはごくむはこれ道なり。武士の家に生まれては、義と恩とには一命を捨てて報い奉るこそ、人にて候へ。いよ〳〵心を固め、亡君の御ために命を捨て給はるべく候。かしく。（原惣右衛門の母）

十一　春の水

蕪村

春の水山なき國を流れけり
うぐひすや家内揃うて飯時分
菜の花や晝ひとしきり海の音
春風や堤長うして家遠し
牡丹散つてうちかさなりぬ二三片
さみだれや大河を前に家二軒
石工の鑿冷したる清水かな
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
月天心貧しき町を通りけり
西吹けば東にたまる落葉かな
磯千鳥あしをぬらして遊びけり
宿かせと刀投げ出す吹雪かな

十二　單語のいろ〳〵

一　用言

濃い　青空には、春の　國から　生まれて　來たかと
思はれる　白雲が、山の　懷(ふところ)から　顏を　出す。
やはらかな　日ざしが、窓　一ぱいに　降りそゝぐ。
緣先の　雪が、かすかな　音を　立てて　崩れる。
風は　まだ　うら寒い。けれども、家々の　窓も　障子
も、一せいに　あけはなされて、どこからか、カナリヤ
の　さへづりが　朗かに　聞えて　來る。

○右の文で、傍線を引いた單語は、自立語か附屬語か、調べてみよ。

○それらに活用があるかないか、調べてみよ。

自立語で、活用のある單語を用言といふ。

○傍線を附けた單語を、次の例にならつて文の終りに用ひ、いひ切りの形にしてみよ。

今日は　暖かい。

明日　行く。

ほんたうに　きれいだ。

○右のほかに、「暑い」「寒い」「書く」「讀む」「話す」「りつぱだ」「きれいだ」「うれしい」「作る」「朗かだ」「登る」「苦しい」等、できるだけたくさんの用言を取りあげて、そのいひ切りになる時の音を比べてみよ。

これでどういふことが發見されるか。

(一)　飛行機が　飛ぶ。
　　鳥が　鳴く。
　　花が　咲く。

これらは、「ウ」の段の音でいひ切りになつてゐる。

(二)　飛行機は　早い。
　　この　花は　赤い。
　　山の　中は　涼しい。

これらは、「イ」の音でいひ切りになつてゐる。

(三)　春は　暖かだ。
　　海が　おだやかだ。
　　花が　きれいだ。

これらは、「ダ」の音でいひ切りになつてゐる。

(一)のやうなものが動詞であり、(二)のやうなものが形容詞であり、(三)のやうなものが形容動詞である。つまり、用言はこの三つに分けることができる。

二　體言

まだ、夜が　明けきらない　うちに、わが　偵察機隊は、敵を　求めて　母艦を　飛び立つた。

私は、「今日こそは　敵を　とらへて　くれ。さうして、無事に　歸つて　來て　くれ。」と、海上に　一機　二機と　消えて　行く　機影を　じつと　見送りながら、心の　中で　祈つた。

朝食後、「配置に　就け。」の　號令が　全艦に　響き渡つた。　用意は　出來た。　さあ、　來い。　唯　偵察機から　の　吉報を　待つばかりだ。

○右の文で傍線を引いた單語は、自立語か附屬語か。

○これらに活用があるか。

これらの單語のうち、「夜」「偵察機隊」「私」「號令」「用意」等は、いづれも、「が」「は」「も」を伴なつて主語になつてゐる。　このやうに、附屬語「が」「は」「も」を伴なつて主語となる單語を、體言といふ。

「敵」「今日」「海上」「一機」等は、この文の場合では「が」「は」「も」を伴なつてゐないけれども、例へば次のやうに、

敵は　たちまち　敗走した。

今日も　よい　天氣だ。　海上は　靜かだ。

一機が　體當りを　敢行した。

となつて、主語としての文節を作ることができる。　だから、これらも體言である。

體言は、又、名詞といふ。　名詞には、次のやうに、いろ〳〵なものがある。

(一)　机　雀　梅　石炭　家　機械

(二)　心　勇氣　衛生　時間　今日

(三)　太平洋　富士山　信濃川　琵琶湖

(四)　東京都　大阪府　長崎縣

(五)　楠木正成　吉田松陰　東郷元帥

(六)　一つ　二　三人　四羽　第五　六つめ　七時　幾つ

(七)　私　あなた　これ　あつち　どこ

これらのうち、(一)(二)は事物の名を表すもの、(三)(四)(五)は地名や人名を表すもの、(六)は數を表すか、數による順序を表すものである。

これに對して、(七)は事物の名を表すものでもなければ、地名・人名を表すものでもない。武田といふ人でも、山本といふ人でも、みんな自分のことをさして「私」といふことができるし、又、相手が武田といふ人でも、山本といふ人でも、それをさして「あなた」といふことができる。

名詞の中で、(三)(四)(五)のやうに、地名・人名を表すものを固有名詞といふことがあり、(六)のやうに、數に關係するものを數詞、(七)のやうに、事物の名をいはないで、直接事物をさしていふものを代名詞といふことがある。

代名詞には、「私」「あなた」「どなた」のやうに、人をさして用ひるものと、「これ」「そこ」「どちら」のやうに、事物・場所・方角をさしていふものとがある。

○人に關する代名詞は、目上の人に用ひるものと、友人などに用ひるものとで、違ふことが多い。どんなに違ふか、調べてみよ。

三　副詞その他

九十三ページにある例文のうち、「また」「わが」「さうして」「じつと」「さあ」「唯」等も、活用のない自立語であるが、これらは普通、主語の文節になることのできないものである。これが、體言と違ふ點

である。

そのうちで、「まだ」「わが」「じつと」「唯」は、それだけで文節となつて、下に來る文節にかゝる修飾語になつてゐる。即ち「じつと」は「見送りながら」にかゝつて、「見送る」といふ用言を修飾し、「わが」は「偵察機隊」にかゝつて、「偵察機隊」といふ體言を修飾してゐる。即ち、用言を修飾するものと、體言を修飾するものとがあることがわかる。前者を副詞といひ、後者を連體詞といふ。

○前例の「まだ」「唯」は何を修飾してゐるか。

網の　網を　しつかり　つなげ。

世間は　すつかり　失望した。

今日は　ずゐぶん　暑い。

右の「しつかり」「すつかり」「ずゐぶん」は副詞である。このやうに、修飾する副詞と修飾される用言とが、すぐ續いてゐることもあるが、前例の「唯」のやうに、用言との間に他の語がはさまつてゐる場合が少くない。

もつと　ゆつくり　歩け。

よほど　はつきり　見える。

右の「ゆつくり」「はつきり」は、「歩け」「見える」にかゝる副詞であるが、「もつと」「よほど」は、更に「ゆつくり」「はつきり」を修飾する副詞である。

副詞は、用言の外に、副詞をも修飾するのである。

○次の空白に適當に書き入れよ。

(一)　決して　でき□□。
(二)　とても　書け□□。
(三)　多分　だめで□□。
(四)　さぞ　お困りで　ございま□□。
(五)　もし　行けなかつ□□、許して　くれたまへ。
(六)　たとへ　失敗しよう□□、やり拔いて　みせる。

このやうに、副詞には、下に來る言葉に特別のいひ方をさせるものがある。

○次の文について、今「明日」「二つ」は、副詞か體言かを考へよ。

今　來た　ところです。
明日　東京へ　行きます。

みかんを　二つ　ください。

○體言と副詞とは、どうして見わけるか。

ある　夜の　ことで　あつた。
あらゆる　ほめことばが、かれらに　浴びせられた。
大きな　力で、ぐん〳〵と　人を　引つぱつて　行かれる。
小さな　すみれが　咲いて　ゐた。

右の「ある」「あらゆる」「大きな」「小さな」は、體言を修飾してゐるから連體詞である。それ〴〵、どの體言を修飾してゐるか、考へてみよ。

もう一度、九十三ページの例文を見よう。そこにある「さうして」と「さあ」は、主語でもなく、述語でもなく、又、修飾語でもない。

○文の成り立ちの上から、主語でも、述語でも、修飾語でもないものは、何か。

「さうして」「さあ」は、いづれも獨立語として用ひられるものであるが、同じ獨立語でも、「さうして」の方は下へ續く意味が強く、「さあ」は殆どそこで意味が切れる。

明日は　雨でせうか。

さあ。

のやうに、「さあ」はそれだけで一つの文にさへなり得る。「さうして」のやうなのを接續詞といひ、「さあ」のやうなのを感動詞といふ。

○左の文中、傍線を引いた部分は、接續詞か感動詞か、考へてみよ。

道は　かなり　遠い。　しかし、　車で　行けば　時間はかゝらない。

山　又　山を　分けて　行つた。

京都　及び　奈良は、　舊都で　ある。

あ、　さうだつた。

おい、　網を　揚げるんだ。

もし〳〵、　田中さんですか。

はい、　わかりました。

いや、　そんな　ことは　知りません。

四　助動詞と助詞

世の中に　容れられないと　いふ　ことは、　何でも　ありません。　今の　亂れた　世に　容れられなければこそ、ほ

んたうに　先生の　大きい　ことが　わかります。

○右の文で、傍線を引いた部分は、自立語か、附屬語か。

○それらに活用があるかないか、調べてみよ。

附屬語で活用のあるものを助動詞といふ。

生まれた　家を　出て　行くのです。　どうぞ　私に　代つて、　おとうさんや　おかあさんを、　だいじに　して　あげて　くださいね。　おかあさんは、　さう　お丈夫では　ないんですから。

○右の文で、傍線を引いた部分は、自立語か、附屬語か。

○これらに活用があるか。

附屬語で活用のないものを助詞といふ。

十三　雪の山

一

一條天皇の御時のこと、或る年の十二月十日過ぎに、京都ではかなり雪が降りました。

お后は、その頃、御休養のため宮中からおさがりになつて、或る御殿にいらつしやいましたが、珍しく雪が降つたので、その日、六七人の官女たちと、お庭の雪を眺めていらつしやいました。清少納言も、お側近く仕へてゐました。

廣いお庭では、大勢の男たちが、雪をかき集めては、それを一箇所に積み上げてゐます。見る〳〵それが高くなつて、見上げる

ほどの雪の山になりました。

お后は、官女たちに、

「この雪の山は、いつまで残つてゐるだらうね。」

と仰せになりました。

皆は、ちよつと顔を見合はせましたが、

「十二三日ぐらゐはございませうか。」

と、一人の官女が申しますと、

「そのくらゐと、私も思ひます。」

「私も、さうと思ひます。」

と、次々にお答へ申し上げました。

お后は、この時まで何もいはないでだまつてゐる清少納言に、

「そなたはどう思ふ。」

と、お尋ねになりました。

「正月の十五日まではあらうかと存じます。」

これが、清少納言のお答へ申し上げた言葉でした。　すると、一座が少し動揺し始めました。

「そんなに長くあるでせうか。」

「幾ら長くても、今年のうちにはきつと消えるでせう。」

「さうですとも。　この雪が大晦日（おほみそか）までであらうなどとは、とても考へられません。」

官女たちは、口々にいひました。　さういはれてみると、少しいひ方が大きかつたかしら。と、心に思はれないでもありませんでし

たが、負けぎらひの清少納言は、官女たちに、

「私は、どうしても正月の十五日まであると思ひます。」

といつて動きません。かういふ時、清少納言の態度は、いつもはつきりしてゐました。

二

十二月の二十日近くなつても、雪の山は、皆が思つたほど小さくなりませんでした。少しばかり、せいが低くなつたくらゐのことです。

大晦日近くなると、だいぶ小さくはなりましたが、それでも雪の山は、どう〳〵年の瀬を無事に越してしまひました。

三

元日に雪が降りました。よい具合だと、清少納言は思ひました。すると、お后の仰せで、

「今日降つた雪だけは取り除くやうに。」

とのお言葉です。男たちが、雪かきで用捨なく新しい雪を取り捨ててしまひました。

四

正月の三日に、お后は、宮中へお歸りになることになりました。雪の山は、所々黒くなつて、みすぼらしい姿をしてゐます。

「これが、十五日まであるものですか。」

「七日までも、もたないでせう。」

など、官女たちがお互にいつてゐます。清少納言は、同じことな

ら、十五日までこゝにゐて見届けたいものだと思ひましたが、自分も、お后のお供をしてまゐらなければなりません。それで、お庭師を呼んで、

「この雪を消さないやうに、人が踏み散らしたりしないやうに、嚴重に番をしてください。十五日まで雪が殘つてゐたら、きつとごはうびをあげますから。」

と頼みました。ごはうびと聞いて、お庭師はにこ〳〵しながら、

「よろしうございます。きつと氣をつけます。」

と答へました。

五

七日に、清少納言は、正月のお暇を頂いて、宮中から自分の家へさがりました。

十日には、「まだ雪が五六尺四方は殘つてゐます。」といふ知らせです。では、もう大丈夫だと思つてゐる矢先、十三日の夜、あいにく大雨が降りだしました。清少納言は、その夜一夜眠られませんでした。夜が明けるのを待ちかねて尋ねにやりますと、

「ざぶとんほど殘つてゐます。明日までは大丈夫もちます。」

といふお庭師の返事でした。

六

いよ〳〵十五日の朝です。

清少納言は、まだ暗いうちに、使ひの者に大きなお盆を持たせて、

「これに、雪の白い所だけ山のやうに盛つて、持つて來ておくれ。」
といひ含めました。　さうして、その間に、歌を作つて紙に認め、雪に添へてお后のお日にかけようと、清少納言は使ひの歸るのを首を長くして待つてゐました。

使ひの者が歸つて來ました。

「雪はすつかりなくなつてゐました。」

これが使ひの言葉です。

「でも、昨日あんなに殘つてゐて、大丈夫のはずだつたのに。」

「昨日夕方までは、ちやんとありましたが今朝はございません。ごはうびが頂けないといつて、お庭師が殘念がつてをりました。」

もう、歌どころではありません。　そこへ、お后からのお使ひがありました。

「雪は、今日まで殘つてゐたか。」

といふお尋ねです。　清少納言は、

「昨日の夕方までは、確かにございました。　昨夜、誰かがいたづらをしたとみえまして、今朝は少しも無いさうでございます。」

殘念ながら、かう御返事申し上げるほかはありませんでした。

七

正月の二十日に、清少納言は宮中へ參りました。　お后にお目通りして、

「せつかく使ひをやりましたのに、雪はすつかり無くなつてを

りましたと、その使ひが、お盆を帽子のやうにかぶつて歸つてまゐりました時、私はほんたうに殘念でございました。お盆に白い雪を盛つて、つたなくとも私の歌を添へまして、獻上いたしたいと存じてをりましたのに。」

と申し上げますと、お后はお笑ひになりました。官女たちも皆笑ひました。

「それほど、そなたが思ひ込んでゐたのに、實は十四日の夜、人をやつて雪を取り捨てさせたのです。あまり勝ち過ぎて、人に恨まれてはかはいさうだから。」

と、お后が仰せになりました。清少納言は、はつとしました。お言葉はまだ靜かに續きます。

「しかし、雪はまだたくさん殘つてゐたといふから、何といつてもそなたがりつぱに勝つたのです。みかどが、この事を聞し召して、よくもいひ當てたものだと、殿上人たちに仰せになつたさうです。さあ、そなたの、その歌といふのが聞きたいものです。」

官女たちもいひました。

「是非、その歌をお聞かせください。」

たつた今の今まで殘念とばかり思ひつめてゐた清少納言の心は、すつかり解けて明かるくなりました。そればかりか、自分のやうな者を、これほどにまで思つて頂けるかと思ふと、もつたいなくて、泣きたいやうな氣にさへなりました。

「今さら、どうして私のつたない歌を、お目にかけることができませう。どうぞ、それだけはお許しくださいませ。」

かう申し上げながらも、清少納言は、ありがたいと思ふ心で胸が一ぱいになりました。

十四　山ざくら花

うらくとのどけき春の心よりにほひ出でたる山ざくら花　賀茂眞淵

さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ　本居宣長

父母の旅なるわれを思ふらむ待つらむさまのおもかげに見ゆ　小澤蘆庵

富士のねを木の間木の間にかへりみて松のかげふむ浮島が原　香川景樹

壁立てるいはほとほりて天地にとゞろきわたる瀧の音かな　加納諸平

井手曙覽

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ東へ

大隈言道

かささせるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨のはれがた

野村望東

紅のやまと錦もいろ〳〵の絲まじへてぞあやは織りける

大田垣蓮月

音もせずふるとも見えぬ朝じめり枝おもげなる青柳のいと

高崎正風

國といふ國をめぐりて日の本の人と生まれし幸は知りにき

十五　大君のへに

松の下露　太平記

さるほどに、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々・卿相・雲客、皆徒はだしなる體にて、いづくをさすともなく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、初め一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供を申されたりけれ。雨風烈しく道暗うして、敵のときの聲こゝかしこに

聞えければ、次第に別々になつて、後には、唯藤房・季房二人よりほかは、主上の御手を引きまゐらする人もなし。かたじけなくも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこども知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。

いかにもして、夜のうちに赤坂の城へと、御心ばかりを盡くされけれども、かりにも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ちどゞまり、晝は、道の傍らなる青塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草を御しとねとし、夜は、人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、御袖をほしあへず。どかうして夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひてけり。藤房・季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目にあふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに、うつゝの夢に卧し給ふ。

梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し召して、木陰に立ち寄らせ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし

藤房の卿涙を押さへて、

いかにせむたのむかげとて立ちよればなほ袖ぬらす松の下露

院の莊

その頃備前の國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上、隱岐の國へ遷らせ給ふと聞きて、二心なき一族どもを集めて評定しけるは、

「志士仁人は、生を求めて以つて仁を害することなし、身を殺して以つて仁を爲すことありといへり。義を見てせざるは、勇なきなり。いざや、臨幸の路次にまゐりあひ、君を迎へ奉りて大軍を起し、たとひかばねを戰場にさらすとも、名を子孫に傳へん。」

と申しければ、心ある一族ども、皆この議に同ず。さらば、路次の難所に相待ちて、その隙をうかゞふべしとて、備前と播磨との境

なる船坂山に隱れ伏し、今や〳〵とぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遲かりければ、人を走らせてこれを見するに、警固の武士、山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸なし奉りける間高德が支度相違してけり。さらば、美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らんとて、三石の山よりすぢかひに、道もなき山の雲をしのぎて、杉坂に着きたりければ、主上、はや院の莊へ入らせ給ひぬと申す。力なく、これより散り〳〵になりけるが、せめてもこの所存を、上聞に達せばやと思ひ、微服潛行して時をうかゞひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大きなる櫻の木のありけるをおし削りて、大文字に一句の詩をぞ書き附けたりける。

天、勾踐を空しうする莫れ。
時、范蠡無きにしも非ず。

警固の武士ども、朝にこれを見つけて、何事をいかなる者が、書きたるやらんどて讀みかねて、すなはち上聞に達してけり。主上は、やがて詩の心を御覺りありて、龍顏殊に御快く笑ませ給ひぬ。

熊野落ち

大塔宮護良親王は、笠置の城の安否を聞し召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上遷らせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を踏むおそれ御身の上に迫りて、天地廣しといへども、御身を隱さるべき所なし。日月

明らかなりといへども、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に卧すうづらの床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にたゝずみて、人をとがむる里の犬に御心をなやまされ、いづくとて御心安かるべき所なかりければ、かくても、しばしはと思し召されけるところに、一條院の好專といふ者、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折ふし、宮に附き奉りたる人ひとりもなかりければ、ひと防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく、兵、既に寺内に打ち入りたれば、まぎれて御出であるべき方もなし。さらばよし、自害せんと思し召して、既におし肌脫がせ給ひたりけるが、事かなはざらん期に臨んで、腹を切らんことといと易かる

ぺし、もしやと、隠れて見ばやと思し召し返して、佛殿の方を御覧ずるに、人の讀みかけておきたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ば過ぎ取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて、隠形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出さればやがて突き立てんと思し召して、氷の如くなる刀を拔いて、御腹に差し當てて、兵、ここにこそといはんずる一言を待たせ給ひける御心のうち、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに、兵、佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上まで、殘る所なく搜しけるが、あまりに求めかねて、

「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取り出し、底をひるがへして見けれども、おはせず。蓋あきたる櫃は見るまでもなしとて、兵、皆寺中を出で去りぬ。

宮は、不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃のうちにおはしけるが、もしまた兵立ち歸り、詳しく搜すこともやあらんずらんと御思案あつて、やがてさきに兵の搜し見たりつる櫃に、入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵ども、また佛殿に立ち歸り、

「さきに蓋のあきたるを見ざりつるが、おぼつかなし。」

とて、御經を皆打ち移して見けるが、から〳〵と打ち笑ひて、

「大般若の櫃の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄弉三藏こそおはしけれ。」

とたはむれければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。

かくては、南都邊の御隱れ家もかなひがたければ、すなはち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河房・武藏房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、そのうちに年長ぜるを先達に作りて、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君、もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々、かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮・脚巾・草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤め、怠らせ給はざりければ、路次に行き會ひける道者も、勤修を積める先達も、見とがむることなかりけり。

由良の港を見渡せば、沖漕ぐ船の梶をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て、月にみがける玉津島光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目

の王子に着き給ふ。

吉野の花

さるほどに、からめ手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押し寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つてかゝりける間大塔宮、今は遁れぬところなりと思し召しきつて、赤地の錦の直垂に、緋縅の鎧を召させられ、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇にさしはさみ、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群がつて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黒煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄せ手大勢なりといへども、僅かの小勢に切り立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつと引く。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打ち揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つところの矢七筋、御頬先、二の御腕二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも拔き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大杯を三度傾けさせ給ふ。

村上彦四郎義光、鎧に立つところの矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前にまゐつて申しけるは、

「敵既に勢に乘じて、御方の氣疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと、かなはじと覺え候。今は、一方より打ち破つて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し、後に殘り留つて戰

ふ兵なくば、宮の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけまゐらせんと覺え候へば、恐れあることにて候へども、召されて候錦の御直垂と、御物の具とを賜ひて、御名を冒して敵をあざむき、御命に代りまゐらせ候はん」。

と申しければ、宮、

「いかでか、さることあるべき。死なば一所にてこそ、ともかくもならめ」。

と仰せられけるを、義光、言葉を荒らかにして、

「がゝるあさましき御事や候。はや、その御物の具を脱がせ給ひ候へ」。

と申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮、げにもとや思し召しけん、御物の具、直垂まで脱ぎかへさせ給ひて、

「われ、もし生きたらば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にからば、冥途までも同じちまたに伴なふべし」。

と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を、南に向かつて落ちさせ給ふ。

義光は、二の木戸の高櫓に登り、遙かに見送り奉りて、宮の御後影のかすかに隔たらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狹間の板を切り落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、

「天照大神の御子孫、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇第三の皇子、兵部卿親王護良、逆臣のために亡され、恨みを泉下に

報ぜんために、たゞ今自害する有様見おきて、汝らが武運たちまちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。」

といふまゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投げ落し、錦の直垂の袴ばかりに、二つ小袖をおし肌脱いで、白く清げなる肌に刀をつき立て、左の脇より右、腹一文字にかき切つて、腸(はらわた)つかんで櫓の板に投げつけ、太刀を口にくはへて、うつぶしになつてぞ伏したりける。

大手・からめ手の寄せ手、これを見て、

「すはや、大塔宮の御自害あるは。われ先に御首を賜はらん。」

とて、四方の圍みを解いて一所に集る。その間に、宮は引き違へて、天川(てんのかは)へぞ落ちさせ給ふ。

義光が子息兵衛藏人義隆(くらうとよしたか)は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戸の櫓下まで馳せ來たりけるを、父、大きに諫めて、

「父子の義はさることなれども、暫く生きて宮の御先途を見はてまゐらせよ。」

と訓へを殘しければ、力なく暫く命を延べて、宮の御供にぞ候ひける。

船上(ふなのうへ)のみゆき

夜も既に明けければ、船人、ともづなを解いて順風に帆を揚げ、港の外に漕ぎ出す。船頭、主上の御有様を見奉りて、たゞ人にてはわたらせ給はじとや思ひけん、屋形の前に畏まつて申しけるは、

「かやうの時、御船を仕つて候こそ、われらが生涯の面目にて候

へ。いづくの浦へ寄せよとも御諚に從ひて、御船の梶をば仕り候べし」。

と申して、まことに他事もなげなる氣色なり。六條の少將忠顯朝臣、これを聞き給ひて、隱してはなか〳〵惡しかりなんと思はれければ、この船頭近く呼び寄せて、

「屋形の中に御座あるこそ、日本國の主、かたじけなくも十善の君にていらせ給へ。汝らも定めて聞き及びぬらん。去年より、隱岐の判官が館に御座ありつるを、忠顯、行幸を請ひまゐらせたるなり。出雲・伯耆の間に、いづくにてもさりぬべからんずる泊りへ、急ぎ御船を着けておろしまゐらせよ」。

と仰せられければ、船頭、まことにうれしげなる氣色にて、取梶面梶取り合はせて、片帆掛けてぞ馳せたりける。

今は、海上二三十里も過ぎぬらんと思ふところに、同じ追風に帆を掛けたる船十艘ばかり、出雲・伯耆をさして馳せ來たれり。筑紫船か、商人船かと見ればさもあらで、隱岐の判官清高、主上を追ひ奉る船にぞありける。船頭、これを見て、「かくてはかなひ候まじ。これに御隱れ候へ」と申して、主上と忠顯朝臣とを、船底に宿しまゐらせて、水手・梶取、立ち並んで艪をぞ押したりける。

さるほどに、追手の船一艘御座船に追つついて、屋形の中に乘り移り、こゝかしこ搜しけれども見出し奉らず、

「さては、この船には召されざりけり。もし、怪しき船や通りつる」。

と問ひければ、船頭、

「今夜の子の刻ばかりに、千波の港を出て候ひつる船にこそ、京上臈かとおぼしくて、冠とやらん着たる人と、立烏帽子着たる人と、二人乗らせ給ひて候ひつれ。その船、今は五六里も先立ち候ひぬらん」。

と申しければ、

「さては、疑ひもなきことなり。はや、船を押せ」。

とて、帆を引き梶を直せば、この船はやがて隔たりぬ。さてこそ、主上は虎口を御遁れあつて、御船は時の間に、伯耆の國、名和の港に着きにけり。

六條の少將忠顯朝臣、一人先づ船より降り給ひて、

「この邊には、いかなる者か弓矢取りて人に知られたる」。

と問はれければ、道行く人立ちやすらひて、

「名和の又太郎長年と申す者こそ、その身、さして名ある武士には候はねども、家富み一族廣うして、心ある者にて候へ」。

とぞ語りける。忠顯朝臣、よく〳〵その子細を尋ね聞きて、やがて勅使を立てて仰せられけるは、

「主上、隱岐の判官が館を御遁れあつて、今この港に御座あり。長年が武勇上聞に達せし間、御頼みあるべき由を仰せ出さるるなり。頼まれまゐらせ候べしや、否や。速かに勅答申すべし」。

とぞ仰せられたりける。

名和の又太郎は、折ふし一族ども呼び集めてゐたりけるが、舍弟小太郎左衛門の尉長重進み出でて申しけるは、

「われら、かたじけなくも十善の君に頼まれまゐらせて、かばねを軍門にさらすとも、名を後代に殘さんこと、生前の思ひ出死後の名譽たるべし。唯一筋に思ひ定めさせ給ふより、外の儀あるべしとも存じ候はず」。

と申しければ、又太郎を始めとして、當座に候ひける二十餘人、皆この議に同じけり。

「さらば、やがて合戰の用意候べし。定めて、追手も後よりかゝり候らん。長重は、主上の御迎へにまゐつて、すぐに船上山へ入れまゐらせん。方々は、やがて打ち立つて、船上へ御參り候べし」。

といひ捨てて、鎧一縮して走り出でければ、一族五人、腹卷取つて投げ掛け、皆高紐しめて、共に御迎へにぞ參じける。

にはかの事にて、御輿などもなかりければ、長重、着たる鎧の上に荒ごもを卷いて、主上を負ひまゐらせ、鳥の飛ぶが如くにして船上へ入れ奉る。長年、近邊の在家に人を廻し、

「思ひ立つ事ありて、船上に兵糧を揚ぐることあり。わが倉の内にあるところの米穀を、一荷持ちて運びたらん者には、錢を五百づつ取らすべし」。

と觸れたりける間、十方より人夫五六千人出で來たりて、われ劣らじと持ち送る。一日がうちに、兵糧五千餘石運びけり。その

後、家中の財寶ことゞく人民百姓に與へて、己が館に火をかけ、その勢百五十騎にて船上に馳せまゐり、皇居を警固仕る。

長年が一族名和の七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布五百反ありけるを旗にこしらへ、松の葉を燒いて煙にふすべ、近國の武士どもの家々の紋を書いて、こゝの木のもと、かしこの峯にぞ立ておきける。この旗ども、峯の嵐に吹かれて陣々にひるがへりけるさま、山中に大勢充滿したりと見えておびたゞし。

笠(5)　麗(12)　悠(20)　隔(37)　欄(45)　拶(57)　轟(75)　楯(85)　蟻(118)　遅(123)　脇(130)
蒔(6)　銘(13)　蝶(20)　櫓(38)　唄(45)　募(57)　燕(75)　泊(85)　卿(119)　虎(124)　頬(131)
忙(6)　膽(15)　龜(21)　廓(40)　曳(46)　煽(62)　嶺(75)　潰(85)　扶(119)　孤(125)　杯(131)
懇(6)　慢(15)　狹(22)　藩(42)　尼(47)　顚(62)　斬(77)　潔(86)　善(120)　辻(125)　弔(133)
模(6)　輩(15)　乞(29)　麓(42)　咽(48)　跳(62)　抵(77)　臆(86)　塚(120)　肌(125)　涯(135)
拙(6)　鷲(15)　畝(29)　誰(43)　忍(49)　樽(63)　抗(77)　肝(87)　隱(120)　蓋(126)　冠(138)
甚(7)　鋲(16)　僅(32)　粹(43)　魔(55)　隙(66)　爪(77)　揃(88)　郡(120)　搜(126)　穀(141)
誦(7)　覆(17)　拓(33)　僕(44)　玄(55)　冒(73)　赫(78)　傍(90)　幽(121)　壇(126)　財(142)
誘(9)　凄(17)　隨(34)　暫(44)　噂(55)　妨(73)　炎(80)　詞(93)　卧(121)　幣(129)　嵐(142)
旋(12)　廢(18)　糧(35)　噴(45)　暇(56)　了(73)　鎖(81)　珍(105)　遷(122)　催(129)
秀(12)　刊(19)　專(35)　衝(45)　挨(57)　享(74)　怨(85)　盆(111)　爲(122)　遁(130)

昭和十九年八月十二日印刷
昭和十九年八月十五日發行
昭和十九年八月十六日翻刻印刷
昭和十九年九月九日翻刻發行

高等科國語 二

新 定價金參拾五錢か

著作權所有

著作兼發行者 文部省

翻刻發行兼印刷者 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

昭和十九年八月十九日
文部省檢査濟

發行所 東京書籍株式會社

須恵器